

姫たちばな

室生犀星

青空文庫

はじめのほどは橘たちばなも何か嬉うれしかった。なにごともないおとめの日とちがい、日ごとにふえるような一日という日が今までにくらべ自分のためにつくられていることを、そして生きた一日として迎えることができた。日というものがこんなに佳よく橘たちばなに人ひと事ことでなく存在していることが、大きな広いところにつき抜けて出た感じであった。日の色に藍あゐの粉がまじってゆく少し寒い早春の夕方には、きまつて二人の若者が何処どこからか現れては、やつと小枝に艶つやと張りとを見せはじめた老梅の木の下に、しのぶずりの狩かりぎ衣ぬに指さし貫ぬきの袴はかまをうがち、烏帽子えぼしのさきを梅の枝にすれすれにさわらし、遠慮深げな気味ではあったが、しかし眼光は鋭く、お

互に何の思をとどけに来てゐるかを既に見貫みぬいでゐる、激しい顔色をしてゐた。一人は西の方の築地ついでじに佇たたずみ、一人は東寄りの角の築地のかげに立つてゐた。一人が山梔子色くちなしいろの狩衣をつけていれば、一人は同じ山吹色やまぶきいろの折目正しい狩衣を着てゐた。次の夕方に一人が蘇芳すおうの色の濃い衣をきてくれば、べつの若者はまたその次の日の夕方には、藤色とも紫苑しおんの色にもたぐうような衣をつけ、互の心こころ榮こころえに遅れることがなかつた。また、時には少年の着るような薄色の襲かさねを覗のぞかした好みを見せれば、次の夕方には、もう一人の男もそれに似合うた衣を纏まとうてゐた。一人がなよやかな氣高い香ことうを贈るために女房連に頼み入れば、一人は七種香しちしゆかうの価あたい高いものを携えてこれを橘の君に奉れと申し出るのであつた。和泉いずみの

山奥の百合根をたずさえ一人に、べつの男は津の国の色もくれないの鯛の折をしもべに担わせた。こうして通う一人は津の国の茅原という男だった。そして別の人は和泉に父をもつ獵夫であった。衣裳のはやりと絢爛を尽くした平安朝の夕々は、むしろ藍ばんだというよりも濃い紫を溶き分けた。築地の堀だけを白穂色にうかべる橘の館に、彼女を呼ばう二人の男の声によつて、夕雲は錦のボロのようにさんらんとして沈んで行った。

「今宵も見えられてか。」

橘は夜になるときまつて女房に一応こう聞いて、眉をひらくよ
うな美しさを瞼のうえに見せた。

「お一人様は東寄りに、べつのお一人様は西寄りの築地のかげに

まいつていられます。」

「してお召物は？」

「蘇芳すおうに紫苑しおんの同じお好みにございます。そしてただひと目だけでもお目もじにあずかりたいとお互に申しておられます。何とぞ、ひと目だけお目にかかられますよう。」

「お一人にお目にかかりお一人にお逢あいせぬ訳にはまいられませぬ。かたくおことわりあるように。」

「それもいまになっては改めようとでもございません。」

女房はもう手の尽くしようもなかった。どのように無下むげにいつでも二人の若者はそれに応こたえることなく、夕とともに訪れをやめることはなかった。

「あなた様が直接に仰せおほられてはいかがでございましょう。」

「このわたくしがじかに。」

「そういたされるより外にお二人を去らせることができませぬ。」
橘はそんな大胆なことはいえなかつた。顔を見せるといふより、橘が門近くに出てゆくだけでも、二人の心の傷は一そう深まるにちがひなかつた。それに、橘は突然二人が来なくなるようなことがあつたら、毎日いままでにくらべてどう暮していいかが、考えても方向のないさびしさだつた。橘ははじめは池のほとりに毎日二本あてのあやめを移し植えて、「これは蘇芳すおうの君、これは紫苑しおんの君」、というふうに心ひそかにその日その日をかたみにしていたが、女房はそれほどまでになるお心なら逢つておやりになれば

若者らもあきらめるものなら、あきらめるであろうにというのであつた。橘は心で受けるものだけしか、二人から貰もらわないつもりだつた。あやめは池のほとりを囲み、もはや移し植えようとしても、南底なんていには一芽のあやめの株も残さずに植え代えてしまった。あやめの数は二人の男の通う同じ日取りの同じ数をかぞえていて、株のわかれめに莢さやほどの蕾つぼみの用意を見せ、緑は葉並めだちを走つてすくすく伸び上つていた。数えれば七十幾本に及ぶ芽立は、津の国の人と和泉の国の人の通いつめた日取りをかぞえていた。橘は、どちらを愛しようと考えるひまもなく、二人は同じ夕の時刻にやつて来て同じ時刻にかえつて行つたから、橘は、同じ人間が二つにわかれて来るのではなからうかと思ふくらいだつた。物腰の静か

さもそうなら一人が咳せきをすれば、間を置いてまた一人がそれを遣やつていた、顔かおかたち容ちもこれほど似た人は多くあるまいと思われるくらい、青年の盛りともいうような頬や鼻には美事みごとな照りを含んでいて、少し硬いくらいな額の明るい広さもそっくりだった。知らぬ人が見たら兄弟だと思うであろう。橘はどちらを離して見る事が出来ず、どちらが優まさつているとも思えなかつた。こんなにして通う一人につけばあとの一人はどうなるだろう、橘はそんな気は少しも持たず二人のどちらにも、歌は返さなかつた。唯ただ、橘自身の気持にははじめはそわそわした心嬉うれしさばかりが先に立つたが、次第にこれは一体どうなる二人であろうと、それをどのようにしたら自分の立場があるのかと、橘は、そんな気の重たさが

一日ずつふえてゆくような気がした。妙なことには二人の人は二人ともいいところがあつて、別々に考えることは出来ても、一人に従つき一人を悲しめるということができなかつた。一人がじつと見る眼の中にある美しさは人間のいのちとすれすれにあるほとぼしりはこんなものかと思わせるほど、やるせないものだった。なのに、べつの一人の眼附めつきはただ悲しみだけを表わして、橘をひたと見入るばかりであつた。瞳ひとみというものの後側も見えるものであつたら、この二人の人の瞳は実際は一つの瞳であつてどちらも外すことができないうものであろう。橘はどちらも好きでありどちらも引き離すことのしにくいものであると考え、それが自分で大それた考えとは思えなかつた。年齢も背丈も、手つきのきやしやな

のにも、声や顔色、そして何時いつも一人が蘇芳すおうの色なら別の一人も、それに似た衣をきることも、何と似かよつた二人であつたらう、それに、橘一人に通うということにも、いまは、それを冷淡にかんがえるには余りにも深はまりして、その人らを見ている自分であることに気づいた。その上、若さも言いようのないものであるのに、どれも愛かなしく、二人ともそのまま心にしまつて置きたかつた。しかし女はそんなことを考えるだけでも悪いという人があつたら、二人のいのちのほとぼりはどうなるであらう。女はものを考へてはならないとは誰でもいい得ないであらう。だが、橘は、ここまで来るとやはり一体自分はどうすればいいのであらう、二人とも逢わずにいた方がいいのか、何時いつまでも門かどに二人を通わ

したままでいいのか、橘はここではじめて行きづまり、例の重たいものにもた靠れかかられるように身うごきならぬものを、自分のまわりに感じ出した。

移し植えたあやめはどうに花をちぢらせ、つりどの釣殿うぐいす近く鶯の音が老いて行つても、二人の男は通いつづめた。父のもとつね基経は永い間、ほとんど耐えかねていたように、あ或る日、橘を呼んでいった。

「一人にきめてお逢いしたらどうか、こんなに見苦しく永い間二人で通うということは見ていても見づらいではないか。」

「一人にお逢いすれば一人がおかわいそう可哀想でございます。ですから、お二人ともわたくしはお逢いいたしませぬ。」

「では何時までも通うてくるではないか。世間の聞えも悪い。」

「父上のよいお考えをお聞かせくださいませ。」

基経は何時かは茅原かやはらと獵夫さつおが太刀たちを合あわすようなことになりはしないかと、二人が狙ねらい合あっている呼吸いきづかいを感じずにいられた。行きついた果はてに僅わずかなはずみに刃やいばを合あわすようになることも、もう、眼に見えて迫せまっていた。たんに、ずるいとか、恥ちさらしとかいうふうな浅薄せんぱくな考えではなく、二人とも、純まことな青年の心こころひとすじで対むかっていることも基経は知しっているだけ、それがどういいう烈はげしい破やれ目を見せるかが分わっていた。といいつてこのままま、春も過すぎようとしていいる今、いつまでも通とわせて置おくことが出来できなかつた。塀へいをへだてた隣屋敷りんやしきの女房にようばうたちの口くちにのぼのぼる噂うわさだけでも、基経は早くどうにかせねばならんと氣きをあせらせてい

た。基経自身でも、娘にこうまで打ち込んで来る若者のいじらしさを、娘をいとおしむ心と一緒に感じるときは呼吸を吹きかけてそだててやりたいとも思ったが、二人のうちどの人をえらんでいかさえ分らなかつた。父としての心からは二人とも、娘にほしいと思うくらい美事な青年だつた。ここまで来ると基経は二人を引きはなして見ることはできず、そして二人の妙な宿命的な感じは二人の若者に父親としての愛情をしないで醜酔させて行つた。「このままでは父が困る。」

「わたくしとてもこのままではどうにも、よい考えとてもございませぬ。」

門の前では津の国の人と、和泉の国の若者はじりじりと往来しながら、それをそうしずにいられぬ毎夜の通いを続けていた。装いを凝らした二人は鋭い眼を中の庭にはしらせ、仕えの女たちのうごきにも心をときめかしたが、橘は依然姿さえ見せなかつた。

和泉の国の人には皮肉とも悲しみとも分けがたいものを、津の国の人には持つて行きどころのない混乱を、そしてそれらはお互の意地なくで何処までも打通さなければならぬ、ぎりぎりの処におしよせられていた。橘という女の問題は失われて行っても、人間のいのちの向い合いがどこまでも続けて行かなければならない、無理無体な状態にはいつて行つた。はじめは眼をさけおうていたが、日が経つとちらと交した眼附にも、お互にまた来ているという言

葉があらわれるだけで、あとは冷酷無情の眼のつつきあいしかなかつた。津の国くにびと人は和泉の国人の顔をみるために遣やつて来るものとしか思えず、どちらも、珍しくもないふつちようづら仏頂面ぶつちようづらをあわせるだけで、橘姫のしみるような顔の柔やさしさは絶えて見るべくもなかつた。二人の若者はこのような空々くうくう漠々ぼくぼくのあいだに、いつでも眼に見えてくるものはお互のいのちがどういう機会にか、相触あひふれなければならぬ相殺そうさい的な予測がされてくることだった。そして、それらは不思議に一日ずつふくれ行き、一日ずつ積みかさなつて行くあ或る重たさがのしかかつて行くことだった。二人とも相手を馬鹿だとしか思えず、その馬鹿さ加減はどれだけ嗤わらつても嗤わらいつくせない虚無そのものだった。かれらは先ず鼻さきで、

ふふんと嗤い、肩をゆすぶり太刀に手をかざしながら実に馬鹿馬鹿しいという顔つきで、同じ道路をゆききしながらたまにすれちがうこともあった。お互の心につきあててゆくような笑いが、つめたく、たまに漏らもされることもあった。

宵よいあめ雨はそれほど繁しげくはなかったが、或る夜は二人は同時に門ひさしの廂ひさしに身をよせていた。お互にはんたいの暗くらみに向むかひやいて、骨にしみるような雨の音を侘わびしく聞き入りながら次第に何か話したような妙な経験したことのない状態にいた。それほど、雨の音が痛ましくさわってくるようだった。

「もう幾月になるかの。」

津の国の若者が突然、くらやみに字をこぼすように、よこも、

向かずに話しかけた。

「さよう、ご自分でかぞえて見るのが早うござろう。」

和泉の国人の声は待ちかまえていたように、津の国人の言葉のうえに乗りかかって挑いどんだ。

「御ご辺、ひとつかぞえてくれまいか。」

「黙もらつしやい、話はもしたくない。」

「そうか、話はもしたくないか。」

津の国人の声は怒りをおし耐こらえた、無理をした声だった。

「話はなぞとうのむかしに失なくしている二人だ。」

「では、何がのこっているのだ。」

「それももう判わかり切きっていることではないか。」

「いのちのことか。」

「よく申した。それを申し受ける日が近づいているとは思わぬか。」

「たしかに近づいているな、きのうより一足飛びに近づいているぞ。」

「その時が来たらどうする。」

「必ずいのちを申し受ける。」

「それはこちらからいいたいくらいだ。」

二人の声音こえはすこしの狂いがなく、むしろ、お互おたがひに念をおし合うように冷酷にうち交された。しかも、かれらは顔をむき合わせるあひまみことがなく、雨の中にその言葉をたたきつけているようなもの

だった。いずれの日か、また、どういう不意の機会からか、二人は対むかい合わなければならなかった。きようこそ、明日こそという毎日の焦躁と埋積されたものが、つもりにつもって行つたのだ。二人には何もすることはない、恐らく橘姫の存在すら、かれらの眼にはいつていないかも知れなかった。眼にあるものは津の国の人には和泉の人のいのちであり、和泉の国の人には津の国の人むのいのちの憎さが見えるばかりだった。かれらは、そのいのちむに對きあい、それを奪いあうために生き、その日をあてに生きているのかも分らなかつた。

雨はいよいよ繁しげく、悵いぶせさは二人にとって何か突然な出来事の期待をかけるほど、陰鬱いんうつに陥おち入らせた。

「この雨ではどうにもなるまい、帰るとしようか。」

津の国人は立って手のひらで雨の降りようをこころみていった。

「御辺ごへんがかえれば我らも帰る。」

「そしてまた明日か。」

「もつと先の日だ。いのちのあるかぎり参るぞ。」

「それならこちらもその通りいのちのあるかぎりに参る。」

「だが、津の国人、どちらかが先にいのちのない日のあることだけ
は、忘れないでくれ。」

「それまでおあずけ仕つかまつる。よく、ふとつてたまれ。」

「刃も立たぬほどふとつて退のけるわ。」

二人は同時に雨の道路に飛び出した。

二人はやがて西と東に別れた。くらやみに心を配りながら、どちらにも不意にひらめくかも知れない刃がしらの予感に身をかたくまもり、お互のあしおと蹠音をうしろに聞き入って築地ついでの堀へいぎわを急いで行った。

津の国人と和泉の国人は憑つかれたように橘の門あたりの辺に来て、初よ更ごうまで去らないことは依然続いた。橘姫はもはや恐怖に似た、次第に険悪になる若者の心のすきを、きようも昨日も見ているよ
うなものだった。女房たちの話によると、若者はしまいに門前で果し合いをするかも知れない、事態はその寸前まで立ちいたつて
いるとのことだった。はじめて見た初春のころの若者の眼のやさ

しき、すなおさ、物腰のしずかさなどはとうに失せ、人の眼附もあれほど急激に変わるものだろうかと思われるくらい、彼らの眼つきは粗暴になり何時いつでも飛びかかるような弾はずみを持っていて、お互が門前の居場所からはなれない様子は、怖こわいくらいだと女房たちはいった。はじめに見た武家の御息子ごそくし様のような初ういうい々しい丁寧な言葉づかいも、しだいに失なくなくなつたともいった。

「この上はもはや最後にえらぶものをえらぼう。」
と、基もとつね経は憂色にとざされ、ものうげにいった。

「わらわのため、かくまで御心労おかけして何とも申訳ございませぬ。」

橘は身をもつて詫わびたが、基経はそれは問題ではなかった。

「そちにも、若者にも罪はない、これはくすしき宿縁しゆくえんとしか思われぬ、早く処断しよう。」

「と仰おおせられますと。」

「獵を催そう、その機会に二人にゆつくりわしから話をつけよう。」

橘もそれはかえつて事をあきらかにしていいと思つた。二人を獵に招よんで一日ゆつくりと野に遊んでから、一さいを腹藏なく話そうといつた。

「お前もその日はかれらに逢つておやりなさい。」

「はい。」

「お前はなにもいわずにいた方がいい。それから特に酒肴しゆく肴の用

意もした方がよかろう。」

「はい。」

橘は使者を二人の若者にやり、獵の日どりを知らせた。若者らの喜びはたとえようもなく、橘も、二人をそのように獵に招くことが幸多いことに思われた。天てんいちてんじよう一いち天てん上じようのよき日をえらんだのも、橘の思わくの晴ればれしさからだつた。もしそれがたとえ不幸に終つても若者らとの話し合いからそうなるものなら、関かまわな
いもののように思われた。

獵の日、橘はうす青い単衣ひとえに山吹やまぶき匂においを着て父についていたが、津つの茅原かやはらも、和泉いづみの獵夫さつおも、弓、太刀をはいて、濃い晩春いづくたがわの生田川いくたがわのほとりに出て行つた。二人の男はひと眼見たばかり

で、その昂たかぶった心がわかるほど、烈まばたしい瞬まばたきをくり返して、
基経は用意して来た言葉も容易にいい出せなかつた。自分でさえ
こんなこんなに困こっているのに、女の身である橘はもつと複雑な気持で
あろうと、何度も娘の方をふり返かへつて見た。橘は、野の明るさの
中では一ひと際ときわまばゆいような眼め鼻立はなだちを見せていて、これが自分
の娘であろうかと思おもわれる位、見なれぬ美しさを表あらわしていた。
津も、和泉の男も、控くわえ目ではあつたがこういう明るい日の野で
見る橘の顔のすみずみに、しみ一つない照りのつつましさにいよ
いよ彼らは心にある決意を固かためる一方ひとだつた。

四人は土手の上に坐まつていた。はしばみの高い頂の枝にもはや
田の上のに下くだりて来ぬ春つぐみの鶯つぐみが枝がくれに、幾声も高く油あぶら漕こり

の最中であつた。あぶらの乗つた春の黒鶉は枝々のあいだに翼の光を日の中にちらつかせ、田の畔あぜも、川の面にも、濛もうもう々たる春色が立ちこめていて、二人の若者はうす睡ねむたいような気持で美しい橘の姿を見入つた。二人はもう八十日も橘の館やかたに通うてゐると、そしてきよようのように悠ゆうゆう々と野に遊ぶことは予期しない招きであつた。

橘は用意の酒と肴さかなとを女房たちにはこぼせ、まだ萌もえたばかりの草の上にひろげた。二人の若者ははじめて橘がものを食べるのを見たのである。それは物を食べるということが女の美しさが倍に見え、唇のうごきや頬のうごきの微かすかさにも、いい知れぬ親しさがあつた。このようにしてこの女と朝夕に食べることを一緒に

したら、どれほど愉たのしかろうと若者らは同時におなじ考えにふけていた。

「我ら、野の美しさを永い間忘れてい申した。」

都に住むそうぼう忙ぼうの若者らは、いまさらに野の清い広さにしみ入つて眺めた。津の人は和泉の人の誰にいうとも分らないこの言葉にも、一応なにか答えぬわけには行かなかつた。

「我らとても、野の風ふうしよく色はゆめにも見たことがなかつた。たまにこういう風に吹かれるのも幸せでござる。」

「荒魂あらかたまのやすらうひまもない我らには、明日も此処ここに来て見たく存ずる。」

しかし津も和泉も、きょうこそ、橘の父から何か言い渡される

であろう、恐らく二人に手を引いてもらいたいと直接に否応なしに承諾させるつもりであろうと、かれらは、不気味な憂慮を感じ入っていた。そして、その外にまた別な不意の出来事など、あろうとは思えなかった。津も、和泉の人も平常のいがみあいから離れて、夜ばかり見ていた対手をお互あいてにそれとなく見入った。あれほど憎みおうた二人が明るい野の景色のなかで、比較的平穩にもの語るとは、まるで一度も考えてみたこともなかった。

基経が杯をとって二人にさした。

「お過しあれ。」

「恐れ入ります。」

津も、和泉も、酒はたしなまぬ方だった。かれらは基経に杯を

返すと、基経はものしずかにいった。

「お両所方にも。」

津は、そういわれては、和泉に杯を廻まわさねばならなかった。津は清い水に杯をそそいでいった。

「和泉どの、お一つおつきあいください。」

かたじけの
「忝かたじけうござる。」

和泉もまた同様清い水に杯をそそいで、津に返した。こういう僅かな親しみある機会は、二人を心置きなく顔にゆるみさえ加えた。先刻、かれらがこの野ではじめて対面したときの、するどさは眼のほとりには、もうそのあとを絶っていた。

「きょうのお招きにて姫にもお目にかかり、何ともお礼の申しよ

うもございませぬ。」

「これは我ら兩人よりあつくおん礼申し上げます。」

率直な二人はいつの間にか、我ら兩人とみずからいうようになつた。橘は、いま眼がさめたばかりのような明るい瞳にいたわりといつくしみを加え、二人におおいかかる柔^{やさ}しさのなかにおいていたつた。

「いつも心ない失礼ばかりいたしましたしておわび申しあげます。きょうくつろいだお顔を拝して橘はどのように嬉^{うれ}しいことか分りませぬ。」

「ご挨拶ありがたくお受けします。いつも夜盗のごとき所業の我らなにとぞ、お許しくださるよう。」

津がそういうえば、和泉は顔をあからめていった。

「お心をさわがせてばかりいる罪、きょうこそお詫^わび申し上げる。」

「何も彼^かもすぎ去ったことでごさいます。おわび申さなければならぬのは、このわたくしの至らぬことばかりですもの。」

橘は手をのべて二人の杯を充たした。それは絶大なよろこびを二人の顔にのぼらせ、かれらの心はその手に震えをつたえたほどだった。

かくて、野の遊びのひと時はしずかに去って行った。かれらのいうことは野の穏やかさ美しさより外に、語らいとてもなかつた。ただ、橘の父が何をいい出すかを予測するより外に、これという

不安はなかつた。

「わたくしもきよようのように佳よい景色を見たことがございませぬ。
」

橘は誘われてそういつた。橘がいるから景色が美しいのだということも、若者が殆ど同時ほとんに胸にうかんだ言葉だった。基経は先刻から黒くろつぐみ鷓つぐみの去らぬ梢こずえの姿を見ていたが、この機会を逸いっしてはならぬと、突然、基経は鷓を指差していつた。

「あれを見られい。」

はしばみの枝々をうつろうともしない何羽かの黒鷓を、二人の若者は見上げた。橘も、はつと胸を打たれる思いで、梢を見上げ、父の眼の光を見た。それは、容易ならぬ父の眼のありどころを、

橘は自分自身のなかに感じたのであった。もう、時が来ていると思わずにいられなかつた。基経の第二の声は命令者のようにきびしく叫ばれた。

「鶇をお打ちあれ。」

津も、和泉も、それがどういふ試みの言葉であるかを知っていた。一人は白羽の矢をつがえ、一人は中黒なかぐろの矢をつがえ、狙いが決つた時、同時に矢ははしばみの枝をくぐつて放たれた。それと刻ときを同じゆうして二羽の春の鶇が、津は津の矢に、和泉は和泉の矢がしらによつて、射落されたのであった。橘の顔色は二人を褒ほめるために同じくらいに見える左右の頬ほに、柔やさしくほほ笑みをたたえて見せた。

「お見事にぞんじます。」

それはようこそお射うちくださいました。いずれが負けをおとりになつてもわたくしは父の手前悲しゆうございますのに、お二人ともに劣らぬおてなみを示してくださいましたのは、何にたとえてこの嬉うれしさを申上げたらいいかと、優しい橘は父に向つて快いほほ笑みをうかべて見せ、あまりの嬉しさに父の方にすり寄つて行つた。

「早はや業わざでござつた。なかなかこうは参らぬものだがよう仕し遂とげられた。」

基経の驚きは一層深いものがあつた。鵜を射止めるといふことはたとえ油漕りの最中さなかの動かぬ姿勢であつたにせよ、細かく顛ふえ

るはしばみの枝の中では、枝をくぐってひとなみの技では容易に射止められるものではなかった。右左に別れた二人を見たときにも、基経はいずれも鶉を逸するであろうと、鶉の轉りのはたと歇やんだときにそう思った。だが、その瞬間には鶉はもう射止められたのだ。基経は声を呑のんで同じ二人の若者を眺めた。彼らはしかもていねいにいけにえとなつた鶉を土に埋めてから、

「未熟で恥はじ入り申す。」

二人とも遜へり下つていった。

「あなた方はまるでお一人の方のような人じゃ。」

基経は益ます々窮ますしていった。こうまで人は似るものかと二人の

清らかな眼を見入った。その眼附めつきはどちらも橘を自分のものにす

るためには、どういふ手段も、また労役すら惜しまない真剣なものであった。津の茅原かやはらははじめて和泉の獵夫さつおに向つて、感嘆するようになつた。

「わしは射落さなかつたらそれきりで此処ここから去るつもりだつた。」

「橘の君からも去るお考えであつたか。」

獵夫はその正直さに打たれて敵手ながらも、しみじみその心ねを買つた。

「残念ではあるが、そう覚悟して御座ござつた。貴所きしよは？」

「わしも黙つて去る考えを持つておつた。貴所まかに橘の君をお委せまかをして、……だが、もうお譲りはできぬ。」

獵夫は語尾にちからを入れていった。同様な考えは津の人の胸にもたぎっていた。

「もう一步も退きひ申さぬ。」

しかし彼らはおたがいに心にためてあつたものを、こういう機会に話し合つたことであつてないほど顔の色も弛ゆるみ、どこか、薩さ張りつばしたはればれたところさえあつた。何と永い間こういう平穩な時が彼らの上に訪れて来なかつたことであろう。

この時、水のうえに何やら動くものが皆の眼にはいつた。それは一羽のかいつむりが水のなかに潜もぐり入つた姿だつた。殆ほとんどうぶて、礫ぶてを打つたほどにしか見えないかいつむりは、はつきりと何鳥だかの區別さえできかねるほど廻はるかなものだつた。四人の眼はひとしく

その迅い鳥に眼をとめた。

「我らあのような小鳥は見たこともござらぬ。」

和泉の人は熱心に見入って、誰にいうともなくいった。

「我らも見ることがありませぬ。」

きらびやかな川の面の日ざしのあいまに浮かび上っては、また、ひとしきり水の中に素早いさざ波を立てて沈む雀ほどの小さい水鳥は、春の温んだ水の面にうかんでいるあいだは、またたきするくらいの迅い一瞬のうちであつた。

「あの鳥は何鳥でございましょう。」

橘はかつて見たこともない小さい水鳥を指差していった。

「あれはかいつむりという鳥じゃ、潟にいる鳥じゃがの。」

基経はこういいながらはつと気づいた。この水鳥を二人は射^うるであろうか、基経は何気なく二人をちらと見たとき敏感な若者連は基経の眼の中を、津の人も、和泉の人も、いまかその言葉が基経の口を衝^ついていわれるかを、息を吞んで待ちかまえているふうであった。基経は念を押すように娘の方を見た。橘は禱^{いの}るように父に何もいふなという怖^{おし}気のある色をうかべて、もう、鳥を射^うつのは可^か哀^{わい}想^{そう}だという意味をも含ませた眼附^{めつき}だった。だが、基経はきようは何としても父親としてとるべきものを尽くさねばならなかった。二人の男には生まれた娘をそのいずれかに委^{まか}さなければならなかったのである。

「素早い水鳥じゃ。」

津の茅原は烈しい眼附で弓を手元に引きよせた。

「一射うちでも行けそう。」

和泉の獵夫の眼はぎらついて、何時いつでも矢を番つがえるようなじりじりした身構えを基経の息づかいに打うち交かわして行つた。基経はもう寸時も猶予していられぬ切迫したものを浮き沈みしている小さな水鳥の、迅はやい羽はね捌さばきの微妙さに、しだいに彼自身すら妙に刺し戟げきされて行つた。基経はここで彼らのいずれかを選ばなければならず、そのいずれかの一人を娘から引離してしまわねばならなかつた。父としての基経は耐え切れず大声で突然命令するように厳しくいい放つた。

「あの水鳥を射止めた御仁ごじんに橘を進じ申そう。」

「お父上様。」

橘はなにやら小さい声で制するものを制しようとしかかった。眼はおとめの怖れで、^{おそ}怖れているために比類ない美しさを一心にこめていた。

「きようこそお二人のいずれかをおきめしなければならぬ。」
橘はもういうことがなかった。

津の人も、和泉の人も、その声と同時に立ち上った。顔は布のように白く荒かった。橘の顔は硬^{こわ}ばり、思わず低い驚きの声を発したほどだった。事、ここに至ってはどういようもなく、股^{もも}がこまかくふるえて来て唾のように二人の若者を見守った。

「ご用意は？」

「ようござる。」

矢は番つがえられた。そして一羽のかいつむりが水に浮き上ったがすぐ沈んで行つた。矢は番つがえたままだった。第二の機会は早くも水鳥の浮き上ったときに二人の眼の前に来ていた。矢は一瞬の内に弓づるを離れたが、白々と水の面にただよう二本の矢羽のほか、水鳥の姿は見えなかつた。若者は懲こりずに第三の機会を待つたが、二人とも激怒のために顔は真赤だった。

かいつむりは再び浮き上った。出あしの早い津の国の茅原かやはらの放つた白矢は、小さい水鳥の背を越え、獵夫さつおの中黒の矢羽は水鳥の消えたあとに、音もなく水の中にさびしく沈んで行つた。ついに、かいつむりは再び同じ水には浮かんで来なかつた。和泉の国

人は詰つめよ寄よつていった。

「貴所きしよの矢は早まったのだ。何故、懸かけこえ声こゑの先に射ったか。」

「いや同時に射つたのだ。」

「貴所の矢は先に水鳥を立たしたことは基経氏も知っていられるはずだ。」

和泉の国人は激怒して一歩前に進んだ。津の人は太刀に手をふれて、対あいて手の熱い粗あらい呼吸あそびに噎むせて叫んだ。

「ここを川下に行つて射うち合あおうではないか。ここを射つのだ。」
和泉の人は胸をたたいて叫んだ。

「きょうこそ美事になんじを討ち取つて見せるぞ。」

「きょうこそ永いあいだの思いを知らしてくれ。」

「走れ。」

二人は同じことを叫びあうと、かねてしめし合わせてあったことのように、氣狂いのようになって土手のうえを川下をめがけて馳り出した。さっきのかいつむりを射ち損ねた場所が期せずしてかこれらの目標になつていようだった。

馳りながら津の国の人は周到に注意していった。

「基経殿に中にはいられると事難なんじゆうだ。遠くに急げ。」

「汝こそ遅れるな。」

二人は火がついたようになおも馳りながら、顔と顔とをすり合わせて叫んだ。

「きょうの日が待ち遠かつたぞ。きょうを眼当めあてに生きて来たのだ

。

「きよう汝を射たなかつたら何時の日に汝を射つ時がある。」

津の人と、和泉の人は廻かに基経のいる処から遠ざかつて行き、やつと橘の姿も見えるほどだった。殆、顔を打合わせるように馳りに馳った。

「姫は汝と我との間にはさまれて窮しておられるぞ。」

「汝なかりせば姫も父君もみな安らかであつたらうに、汝が出て来てから凡てが悪くなつたのだ。」

津の国人は馳りながらも、なお尽きぬ嘆きの言葉を絶たなかつた。和泉の国人はからからと哄つた。

「それはこちらからも言いたいことだ。津のなまぐさい汝ごとき

に姫がなびくと思うか、それが汝の間違つたそもそもものだ。」

「片をつける時が来た。このあたりでよかろう。」

二人は先刻かいつむりを射ちそんじた土手のあたりに来て、走
ることをやめた。土手は春の草を纏まとうて、唐の錦の枕からにしきのように柔
らかだった。二人は冷たい草に素足をこころよくあてた。

「此処ここはいい、いづれがやられるにしても寝心地ねごちがいい。」

津の国人は確しつかり乎と足をふまえて、廻か上流を見たが、早、橘
親子からは立木がかげをつくつていて見えなかった。

「距離は？」

「五十歩はどうだ。汝を射うつには近すぎるかな。」

和泉の人は依然つめたく哄わらつて歩を試しながらいった。

「では三十歩にするか、空射からうちをせぬようにしろ。」

二人は五十歩を隔てて、別れた。弓は生きたくちなわのようにかれらの両の手にからみ出した。

「いいたいことがあつたらいえ。」

二人は同時にこう示し合わせるように、互の胸のうちの言葉がききたかった。こうなつてなお、互の何かをきくのはふしぎな気持だった。

「汝があとに残つたら姫にそういえ、津の茅原は心では最後までお慕したい申したと伝えてくれ、我がのこらば汝の思うところを伝えよう。」

「同じことを繰り返すだけだ。だが、きょうこそは宿縁の命を絶

つてきっぱりしたいものだ。汝もおさおさ怠るな。」

二人は最後に何となく冷たく笑い合つて見た。いうことも、もはやなかった。笑うより外に何も表わすものも、また、残つてい
るものもなかった。

「遅れると基経殿が見える……千載せんざいの遅れをとるぞ。」

「同時に矢離れを契ちぎろうぞ、神かけていつわるではない。」

二人は矢をつがえた。手は汗とあぶらで二人とも、指先が光つ
た。

「行くぞ。」

「では、いいか。」

「射て。」

ほとんど

殆、同じ瞬刻しゅんこくにこの言葉は放たれ、お互の耳の中に人の声

としての最後にきくものだった。矢はついに放たれた。津の国人の矢羽と和泉の国人の矢羽とが、白と黒の羽をすれちがった処ところは、二人の距離のちようど真中だった。悲しい矢さけびはあたりの春景色に不似合な、人の心を居竦いすくませる悲鳴をあげて過ぎた。

津の茅原はそのとき胸板むないたのところに、があつと重いものを打ちあてられ、前屈まえかがみからだを真二つに歪まげてしまった。遣やられたとそう思つて支えるものを手でさぐろうとしたが、立木一本とてもなかった。再び、胸のところむねに熱を持ったものが一時にあふれた時に、すでに膝頭ひざがしらが立たなかつた。かれは、潰つぶれたように倒れたときに始めて和泉の国人の方をしつかり見つめること

が出来た。和泉の人はやはり土手のうえに倒れて何かあたりを引ひ搔つかくような恰かつこう好をしながらも、津の人のた打つのを眼だけ生きのこっているように見つめていた。人間の死相というものはああいものか知らと、灰をあびたような顔を見返した。だが、いまは笑うことも叫ぶこともできず、ただ、二人は同時に敵手の矢を胸にうけたことを知っただけだった。冷たい汗のような笑いがひとすじのぼった。

「相射あいうちだぞ。」

かれはそう叫ぶと、対手あいてにきこえたかどうかと思った。和泉の人はそれと同時に何か五位ごい鷲さぎのような奇声を立てたが、意味は分うなずらなくとも、明らかに相射あいうちを肯うなずき合つたものだった。

和泉の人の支えた手ががっくり折れて、しだいに土手のへりの方に向つてもがきはじめた。もう、そこは生田川の土手下になっていた。津の人は和泉の人はたすかるまいと思つたが、突然、風が吹いて顔の皮が剥はがれるような寒さがすると、ずっと先まで見えた土手の続きが見えなくなつてしまつた。流血をしらべようと手であたりの地面の上をさぐると沼のようにとろどろだつた。自分も死にかけている、和泉の人はもう呼吸いきがなくなつているだろうと思つたが、生きられるものなら生きて見ようと漸やっとほのぼのとした希望が生じ出した。まるで考えもつかない不意に湧わいた希望だつた。生きればどうなると彼は忘れかけたものをおもい当てるように、橘の姫の顔が突然頭の中にうかんだ。だが、もう土手

も人も見えなかった。彼は突然、あいて 対手がまだ生きているかどうかをもう一度確めるために、出来るだけ大声に叫んだ。

「和泉の獵夫！ あいうち 相射だぞ。」

だが、実際ではもう声は出ないばかりか、手先さえうごかなかつた。頭ばかりがほんの少しの部分だけがはたらいていた。

生田川の岸边に二人の姿がしだいに遠ざかつて行つた時分、この狂氣した一瞬の出来事は、基経には分りかねる光景であり、あるいは水鳥のいどころを捜しに行つたのではないかと思わせるほど、何が何やら訳の分らぬ一刻の揉もみ合いであつた。だが、橘の顔はぞくぞくするほどの予感で、蒼あおざめてその色うしのを喪うて行つた。

それは彼らがそのいのちの的を射りあうために遠くに駆^{かけ}って行つたものに、毛^{もう}毫^{ごう}相違なかつたからだつた。何時^{いつ}かはその時のあつたことを知つていたが、きよう招^よんだ二人にそのいのちを競わしあやめさせ合ふことの、偶然とはいへ、その非業^{ひごう}の時を早めたことが悲しかつた。一人が生きれば一人は死ななければならなかつた。

「お父上様、お後を！」

橘の声はたつたそれだけで基経に一さいのことを直覺させ、基経は、もう遅いことを知らなければならなかつた。

「そなたもそう思うか。」

「早くお父上様。」

基経は同じ土手の上を馳はしつてあとを逐おつて行つた。時刻はもう二十分くらい経つていたろうか、春の日もそれほど永からぬこの日の夕ぐもりが、しだいに茫ぼうぼう漠ぼくたる生田川のほとりを幾すじかの筋目を見せながら包んで行つた。

基経が辿たどりついた土手の上に、津の国の茅かやはら原は半身を川の方かたに乗り出したまま深く胸を射透いとされて、呼吸いきを絶きつていた。和泉の国の獵夫さつおは土手下にころがり落ちてこれも胸の深部に、背にまやじりで鏃やじりが衝つき抜かれて、息はすでになくなつていた。番つがえた一番の矢はほとんど同時に互の胸部をさし貫いたものとしか、時間や、矢数の関係から考える外はなかつた。鏃やじりの深さと狙いの確かさは二人の精神的に重ちやうじやう重じやう疊じやうされたものが、かくも鮮やかな互のいの

ちを取り合うことに、その生涯をかけて挑いどまれたものに思えた。どうしても二人はここまで来なければ結末がつかかなかつたのだ。どちらに向いてもここまで行き着かなければならなかつたのだ。基経は首を垂れて二人の前に手を合わせた。美しいといえばどれだけ真実であつたかも分らない二人だつた。

橘はやつと二人のむくろのある土手のうえに辿たどりつくくと、そのまま、草の上に膝をついて潜さめざめ々と啼すすり泣いた。こうまでしずいられなかつた二人であることは分つていたものの、きよう、しかも眼の前で果しあうとは考えても考えられなかつた。永い間、橘の門の前に来て元気に颯さつ爽そうときそいおうた彼らとは、どうしてむくろになつた今を考え当てられるだろう、外に、ほんとに外

に生きられなかつた二人であつたらうか。

「早まつたことをなされた。」

一応、橘はこう口に出していったものの、勿論、もちろんここまですになれば来なければならぬ二人であることを知つた。橘は矢疾やきずのあとに清い懐紙かいしをあてがい、その若い男のかおりがまだ生きて漂うている顔のうえに、うちぎ桂の両の袖そでをほついで、あや綾のある方を上にして一人ずつに片袖かたそであてかぶせ、声を出さないで二人にいつた。

「今こそお二人のお心のほどありがたくいただきます。わたくしとても、もはやお後をおしたいするよりお礼の申しようもございませぬ。なにとぞ、お後より橘がまいるあいだしば暫しお待ちください

いますよう。必ず必ず神かけて今宵こよいのうちにも参りとう存じます。
す。」

彼女は手を胸にくみあわせ、まぶた瞼をなでおろして永い間そこをうごかなかつた。こうなるまでに何故にもつと早く二人に逢つて話をしなかつたらうと、橘は、自分の桂うちぎの下にある若者の顔をころに描いた、若者の顔はこの瞬間では一そう美しくさえ映うつつた。

「よくしてくれた。お二人もさぞ喜んでいられるであろう。何事もいうべきことはもうない、お前の心づくしだけがお二人をおちつかせることであろう。」

「お父上様、立派なご最期をお見とどけあそばせ。」

「よく気がついた。拝み申そう。」

父はその矢痕やぎずをしらべた。

くるいなく深くも抉えぐられた鏝やじりのあとも、ほぼ似た鮮やかさであった。しかも、相射ちのおちついた決意は彼らの相貌に一脈の穏やかささえ、ふかくも刻まれてあつた。

「立派な手なみであるぞ、橘、そちは見たか。」

「いいえ、でも、よく分るような気がいたします。」

「そちは幸せであるということはいえないが、女に生まれてこれが栄光であることは忘れぬよう。」

「わたくしお二人様のおん命をお受けするほどのものではございませぬ。」

「お前はその後どうする考えでいるか、決して短慮はするではな

い。」

基経は橘の顔にたゆたわぬ決意された或る気持を感じて、それを挫くじいて置く必要があると思つた。しかし基経にはそれを挫くだけのちからがあるかは、はなはだ疑わしかった。橘はどこか怒りをまじえた声音こえになつていった。

「わたくしの考えはもう決つております。」

「いや、お前はいままでよりも確しっかりして生きてくれなければならぬ。」

基経は橘の眼にくい入つていった。だが、橘の眼はなにかに憧あこがれて漂ひょうびよう渺びようとして煙けぶつているようなところに、ちらりとのぞかせた瞳の反射が美しいというよりも、気高いものだった。人がそ

ういう瞳の反射を見せるときは滅多めったにその機会をとらえがたいものだ。基経は身体からだが引きしまるるようにその瞳を感じた。

「わたくしは人のいのちを粗末にするような、あさはかな女になりたくはございません。」

「娘よ。父のそばに寄り添え。」

橘は父に殆どほとん抱かれるように顔をよせ、ふたたび、それと分らぬ程度に歎すすり泣いた。基経は娘を寸時も一人にして置くことの危険とそれをふせぐために手元から離してはならぬと思った。しかしこれほどまでに自分の娘がもはや一人の女として生長していようとは、今の今まで予測もしないことだった。しかも、漂渺としてけぶるような眼の中には、人間がやみがたい或る決心をしてい

る時だけ、立ちのぼるような蒼白さを見せるものであった。

その夜、橘はいつになく粧よそおいを凝こらせ、晴れやかな夕餉ゆうげの高たか膳たかぜ

膳ぜんについた。基経は、娘がなぜ粧まいをていねいにしたか、なぜ、

わざと笑みさえうかべて膳ぜんについたかを、もはや基経の心にある
 或る考えと打合わせて疑うことができなかつた。基経は娘から眼
 を放さず、その刻々に迫るような凄せい艶えんともいうべきものの裏に
 あるものを読み尽くそうとしていた。

「お父上様、お杯さかずきをただかしてくださいませ。」

「杯を！」

「はい。」

基経は故意わざとほほ笑んで見せ、珍しいことを言うのう、と杯を

橘に手ずからとらせた。橘は、杯をおし戴いたいてしずかに唇に持つて行つた。基経はそれを感じたに堪えるふうに見つめた。

「お前がお酒をのむところを初めて見た。」

「今宵はなにか戴きたくぞんじたものですから。」

「お酒はうまいか。」

基経は機嫌よく、娘のいまは明るくなつた顔を平静な心で見入つた。

「生まれてはじめてお酒をいただくのですけれど、お酒は香気もよろしく大変おいしくございます。」

橘は間もなく頬をそめた。夕餉ゆうげはかくして晩春のひと夜を迎えるために、かなり永い間かかつて終つた。館の内外も今宵はとり

わけ温かく、あえなくなつた二人のための香煙は橘の手によつて絶えることなく、濃い紫の紐ひもをひと間の中にかがり、紐は庭に漏もれ、そして池の上をかすめて行つた。

一夜を越えようとした明方あけがた、生田川のさざ波に銀の粉を振り撒まいたような日の光が映うつつた時分、橘の館では、橘の姿が見えず人びとは騒ぎ立つたが、基経は殆ど直覚的に生田川のほとりを捜せよと、もうそれが決定的であることのように家人に吩咐いいつけた。

橘の姫は、津と和泉の人ととが相果てたほとりに、未だ化粧の香かを匂におわせたまま頭を土手の方に向けてあえなくなつていた。髪を堅く結び、下装束したしやうぞくを極めた彼女のなきがらは、それみずから

が濡れた大きい花の束のようなものだった。館にはこぼれると人びとはそうした心根にいたくも深く打たれた。

基経は頭を垂れて娘の髪をなでさすり、なでさすりながらいった。

「よくしてくれた。褒めてやる、ゆうべからその心でいたことはほぼ分っていたが、かくも立派にしてくれようとは思わなかった。褒めても褒めつくせないほど褒めてやるぞ。」

その夜、津の茅原かやはらの父親と、和泉いずみの獵夫さつおの父とが頭を垂れて、姫の棺ひつぎの前に坐っていた。かれら三人の父はそれぞれの死を前にしてそして橘たちばながあとを趁おうた死をいたいたしく、こころには嬉うれしく何度となく棺に向つてももの語った。官を辞して久しいこの老骨

らは、やつれにやつれていた。

「姫のおいのちがどれだけ二人にほしかつたことでござろう、そして二人はおいのちを戴いた。基経殿のおん悲しみに何とも申し上げられませぬが、あらためて父としておん礼申しあげる。」

津の人の父は頭を畳にすりよせて礼をした。和泉の人の父もまた同様、手をついておごそ厳かにいった。

「宿縁とは申せ、姫の御立派なお最期に我ら人の父としてこれ以上の喜びとてもございませぬ。」

基経は手で二人を制して先ず頭を上げられいと、へ遜り下つていった。

「姫がああしてくれなかつたらわしは恥ずかしいくらいな思いで

「ごぎる。娘のいのちの役に立ったことはせめてもの慰めです。」

「姫とならべて葬ほうむりを致したい、墓碑もそのようにしてやって下

されば、子供の喜びもこれにすぎませぬ。」

和泉の獵夫の父親もその考えを持っていて、やはり基経にこの願いいを容いれてくれるようにいった。

「これが父親として最後の子供の願いいでもごぎる。」

基経は快く答えた。

「三人ともならべて墓碑を立てましょう。」

津の父親は和泉の獵夫さつおと墓さつおをならべることに、烈さつおしい反感と不潔を感じたらしいが、基経の承諾を得た今になっては何もいえはしなかった。ただ、老骨頑固な彼は不意に或る思いいつきを考え出

していった。

「此^{ここ}処は津の国土なれば、和泉の国の人は和泉の土に埋めるのが葬^{そうき}規^きじゃ、和泉の国にはこびたまえ。」

和泉の父親は、老眼に烈しい対^{あいて}手の言葉を感^あじながら、皮肉に一笑してしまった。

「船にて和泉の土を搬^{はこ}び申そう、和泉の土は子供を落着かせて眠らせるであろう。息子殿の父御ほどござって死後にも難題を申さるる方^{かた}じゃ、息子も甚だ残念を致したであろうに。」

彼は老眼をうるませて悲しみを新しく色にうかべた。

「津の国には一つかみも和泉の土はござらぬ。おぬしごとき父を持^もつた息子殿と射^うち合^あつた茅^{かや}原^{はら}も、対^{あいて}手をえらびそくなつたと

でもいおうより外はない。」

「こちらでも、不足な相手だと考えおる。かれこれ申されると、場所がらでも容赦はしませぬぞ。」

かれは詰め寄るとき、息子のいとしい顔さえ眼にうかべた。

「いやはや、息子殿も変った方じやつたが、その父御もいずれ劣らぬほど変った御仁ごじんにござる。」

「無礼千万、もう一度言つて見よ、後悔いたされるな。」

和泉の父親はすでに太刀たちの柄つかに手をかけ、呼吸次第で、何時いつかつと閃ひらめいて行くかも知れない、鋭い気配だった。

「それならこちらでも望んでいたところ。」

津の父親も、すでに、手は太刀のうえに青い汗を搔かいていた。

もう、ここまで来ては、二人の老骨は互に軋きしむばかりだった。かれらは実際は可愛い息子のためにもはや逆上して何の見さかえさえ、ついていかなかった。二人は同時に叫んだ。

「とう、抜け。」

運命は父親同士の頭に荒れ狂うているのか、それとも、息子たちが憑ついているとでもいうのであろうか。——基もと経つねは、手をもつて制した。

「御両所はわしの心になって鎮しずまって下され。」

こういう基経には、津も、和泉の人も、答う言葉さえなかった。彼ら、老骨は頭を垂れていった。

「恥じ入り申す。貴所の姫の御いのちをいただいた二人の父とし

ては、恥じ入りお詫^わびいたします。」

「仲よく葬^{ほうむ}りてやりましょう。子供というものは死ぬまで面倒を見てやらなければならんことも漸^{ようや}く知り申した。」

基経は三基ならべて墓碑を建てることを、二人の父親にはかつた。和泉の国人は翌日、和泉の国の清い土を船ではこび、船は、生田川の岸べに朝はやくに着いた。金色にかがやくような新しい山の深みから掘った処女土であった。和泉の国の父親はそれを墓土にならして、不幸な息子の墓をそこに据^すえていった。

「お前も橘殿のそばにねむることが出来たというものだ。基経殿、御承服^{ねんご}くださるように。」

「懇^{ねんご}ろになされた。」

基経は土を拝していった。

津の国の父親も、もう、なにもいわなかつた。かくも深い父としての思いは、やはり人の父である彼にいまはただ深い感動をあてえたらしく、何度も、低く恥じ入ったような声音になつていった。

「よく為なされた。三人の若者らはいずれも兄妹のようなもの思われてならぬ。」

しの竹の垣を結んだ一囲いの墓畔は、すぐ生田川の流れを見廻みはるかされる、高みのある松林のはずれに建てられた。川の面がかつての日の銀の粉をなすつたように、日の光を反射して美しいさざ波を掻き立てていた。

基経は姫の棺ひつぎに、香奩こうれん、双鶴そうかくの鏡、塗扇ぬりおうぎ、硯すずりばこ、篋か一
 式等をおさめ、さくら襲かさねの御衣おんぞ、薄色の裳もに、練色ねりいろの綾あやの袿うちぎを
 揃えて入れた。その心づかいはかつての日の橘のあでやかな倂おもかけを
 しのぶ好箇こうこのよすがでもあつた。津の父も、和泉の父も、狩衣かりぎぬ、
はかま袴、烏帽子えぼし、弓、胡籙やなぐい、太刀たちなどをその棺に入れ、橘の姫の美
 しさに添うようにした。かくて、かれらのねむりを妨げる者は、
 誰一人とてなかつた。

歲月を経て或る旅人はこう書いて、もう、そろそろ苔こけの生えか
 かったみだりの墓のうえに、紙も、白じらと秋かぜの吹く日に置
 いて行つた。

束の間ももろともにとぞ契りたるちぎ

逢ふとは人に見えぬものからあ

また歳と月とがいみじくも流れ去つた。或る日、一人の旅人は一首の棄すてうた歌をしるし、紙に礫こいしをのせ風にも立たぬようにして行つた。前書まえがきには、「一人の男になりて」と書き、男のどちらかの心をいたわり、また、旅人みずからの心の傷手いたでをうたうがような調べも含まれてあつた。

同じ江に住むはうれしきかなれど

など我とのみ契らざりける

歲月は墓石に白い百年の苔こけをきざみ込んだ後の年、時はあたたかも駘蕩たいとうの春の半ばだった。女にかわりて、その心をのべしるした歌を一首、蓮華台れんげだいのすき間の苔のあいだにさし込んで、風のごとく去って行った旅人があつた。

住みわびぬわが身投げてむ津のくにの
いくたの川のあらぬかぎりは

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 上」作品社

1982（昭和57）年5月発行

初出：「日本評論」

1941（昭和16）年3月号

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

姫たちばな

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>